関東地区KGK卒業生会誌

コイノニア
koivonia

207号

石KGK SHIZUE 70th

特集

交わりを通して支えること

連載

「学生世界のリアル」
繋がれるバトン 橋本 一空

「仕事の神学」
地方公務員 石原 献二

新主事コラム
FRESHERS 富田 詩織

卒業生会・コイノニア年間テーマ
つながる交わり

Background image provided by freepik.com

特集

交わりを通して支えること

矢島志朗
（慶應義塾大94年卒）

KGK卒業生会は何のために存在するか。
この問いを考えるとき、「交わり」と「支援」という言葉が必ず出てきます。
私自身も一人の卒業生として、また主事としてこのことを考え、語り合ってきました。
「交わり」と「支援」は卒業生会の「両輪」であり、また両者は一体となっているとも言えます。

卒業後の交わり

学生時代より頻度は減っても、同期会やホームカミングデイ、世代、地域、職域ごとの集会など、卒業生たちは交わり続けることを選んできました。それはＫＧＫが生涯運動であり、卒業後も遣わされた地で福音に生き、福音を伝えることを励まし合うことに価値があると実感してきたからです。

私自身、卒業直後に大きな助けになったのが、同期の交わりでした。同期から栗原純人主事（現ＫＧＫ理事）が立てられて、3年間ほぼ毎月、支える会の世話役の集まりがありました。主事だけでなく、世話役一人一人も自分の近況を分かち合い、共に祈りました。本当に励まされる交わりでした。しばらく後に2年間、関東地区卒業生会役員の奉仕をしましたが、その交わりにも支えられました。当時の卒業生会が掲げた年間テーマは「生きて支えるＫＧＫ」でした。卒業生の自分たちが福音に生きることを貫いてその生き様を証していくことこそが、学生たちへの最大への励まし、支援になると信じ、このテーマで2年間歩みました。

卒業生同士の交わりの恵みは、ただ内輪で盛り上がったり、楽しい、懐かしいといったものではありません。この交わりを通して、神様との交わりに、また自分の原点、軸に立ち返っていけるところにあります。ハッピーな時でもボロボロな時でも正直に語り祈り合える交わりを通して、自分が生かされ遣わされていることの自覚が新たにされて、再びそれぞれの地での歩みに送り出されていくことができます。ボンヘッファーは「共に生きる生活」の中で、キリスト者の交わりは「お互いに救いのよきおとずれを持ち運び合う交わり」であると語りますが、まさにそのようなことが、卒業生同士の交わりでも起こっているのです。

交わりを通して支える

栗原主事を支える会の世話役として仕えていた時は特に、「主事が自分たちの代表として学生世界に行ってくれている」という誇りと喜びがありました。世話役会で主事の報告を聞き、また自分の課題も聞いてもらって祈り合える、励ましの場でした。「交わりを通して支える」という関係の実感がありました。

卒業後12年を経て、今度は自分が主事として送り出していただく立場になりました。中四国地区担当主事として働きが始まり、ある日、支えてくれる同期の友人に「本当にありがとう」と言ったところ、「僕の方こそありがとう。僕たちに代わって学生のところに行ってくれてありがとう。」との返事をもらって、胸が熱くなったことがありました。このような支えがあるからこそ自分は学生宣教の最前線で働くことができる。そう感じながら6年間、広い地区を駆け巡ることができました。卒業生のみなさんひとりひとりがＫＧＫを覚え、主事・ＧＡを祈りと献金をもって支援し続けてくださっていることが、私の力になり、主事会皆の力になっています。

また、主事として送り出していただきながら、自分も他の宣教団体で働く友人を支援したり、宣教師の支援をしています。宣教師からのレターを受け取り、働きや家族の様子を読むたびに感謝と喜びが湧いてきます。メールなどでレターの感想を伝えると、その際にちょっとしたやりとりが生まれます。「共に宣教している」感覚が強くあって、その一家が健やかであること、働きが前進することへの願い、祈りが自然に湧いてきています。まさにピリピ1：5にあるような「福音を伝えることにともに携わる」歩みをさせていただいていると思っています。卒業生の皆さんにも、それぞれの主事が発行するレターを通して、この「共に宣教している」感覚をお分ちでき、福音宣教の働きに携わる喜びを共有できているのならば、こんなに嬉しいことはありません。

主事・ＧＡは、卒業生たちが「私たちが恵みを受けた学生時代に、同じような経験をできる後輩が一人でも多く起こされるように」という熱い願いと祈りから立てられた働き人です。ＫＧＫ運動は、学生たちの主体的な運動であるとともに、それを支える主事・ＧＡ、卒業生、賛助者、諸教会が交わりと支援によってつながり、一体となってなされてきた運動です。それは本当に豊かな恵みであり、かけがえのない財産です。これからも祈りと献金をもって主事・ＧＡを支えていただき、生涯福音に生きることを励まし合いながら、学生宣教の働きをともに担っていただければと願います。

卒業生会
お知らせと報告

全国代表者会議に参加して

ルーテル学院大卒18年卒
伊田 準

２０１８年度にルーテル学院大学を卒業しました、伊田準と申します。私は今年度より、卒業生会役員として奉仕をさせて頂く機会を与えられております。

全国代表者会議は２０２１年10月15～16日に開催され、私自身全国的な交わりに参加させて頂く機会は学生時代なく、今回が初めてとなりました。

最初は総会のような真面目できっちりとした報告会を想像していました。実際に参加してみると、真剣さももちろんですが、何より他地区の方々の熱量に驚かされました。

地区ごとに抱える悩みもありながら、同じ立場として真摯に向き合い、恵みをシェアしながら祈り合う交わりに懐かしさを覚えつつも私自身そうした交わりを持つことから遠ざかっていたのだなと感じずにはいられませんでした。

今回他地区の方々との交流を通して私が持ち帰った課題は「関東地区卒業生会のあり方」です。関東地区はその大きさ故、イベント企画なども多く、地区のあり方について役員間でも真剣に議論する機会が少なくなっている現状があります。

規模の差はあるかもしれませんが、他地区のオリジナルな交わりの持ち方や「交わり」に対しての想いを、形にしよう・祈ろうという熱意には自分自身考える良い機会を与えられたと思います。

また、各年代の方が集まったことも私にとっては新鮮な体験でした。様々な地区運営の経験、また働くことと信仰について、ファミリーと独身、大人になって学生とは違う視点での課題についてどのように考えていくのか、初めて参加した私にとってこの点はこれからの私の人生を考える上でもとても有意義なものだったと感じています。

役員としての奉仕はまだ続けさせて頂く予定ですが、新型コロナなど、世界が動いていく中、これからの卒業生会のあり方について、またキリストを世に伝えていく私たちの交わりについて新しい視点で考えていきつつ、主体的に関わっていく恵みを覚えて、今後も奉仕をしていけたらと考えています。

職域別エキスポに参加して

東京理科大19年卒
木下 泉

私自身2年ぶりに働くことをテーマにしたＫＧＫ卒業生の集会に参加しましたが、非常に貴重な時間となりました。日々の業務に追われている中で一度立ち止まり、働くことについて思いを巡らすことができました。

私は専門商社で営業の仕事をしています。自分の顧客対応や見積り作成などの事務作業が、神様の栄光を表せているのか、職場の上司や同僚に対して証となる働きができているのかと自信が持てず、クリスチャンとしてこの会社にいる意味があるのかと思ってしまう時があります。

しかし、講師である藪氏からクリスチャンにとって働くことができることの特権は、素晴らしい成果を出せることではなく、働くことの真の意味や喜びを知り、弱さや間違いを素直に認めながら神様に委ねて仕えていくことができるところにあると語って頂きました。この講演は仕事へ葛藤を覚えてしまうことが多い自分にとって大きな励ましとなりました。失敗や経験の至らなさを感じることは多くありますが、仕事の真の意味を忘れずに働いていけることを願っています。

また「働く」ことをテーマにした集会は、私たち卒業生だけでなく現役学生にも非常に大きな意味があると考えています。実際に働いているＫＧＫ卒業生の生（なま）の話を聞くことによって教会やＫＧＫなどでの学びを実際にどのように活かしていくのかをイメージすることができ、働くことへの良い備えになるのではないでしょうか。

これからもＫＧＫが仕事の領域でも福音に生きることを励ますことができるよう、さらに用いられていくことを期待しています。

Water color vector provided by freepik.com

副総主事・全国卒業生会担当
塚本良樹主事コラム

卒業生の姿は学生を励ます

年末に東北地区 KGK の年末合宿にオンラインにて参加し、2 回の説教奉仕を担当しました。東北地区としては久しぶりの対面での合宿で、学生たちが楽しそうに交わりをもっている姿が画面越しでも見て取れました。

今回の年末合宿のテーマは「世代交代」。卒業とともに入れ替わる学生の運動である KGK にとって、常に問われるテーマです。KGK 運動が世代を超えて継承され続けるために、主なる神は、卒業生を通して主事・GA を立ててくださいましたが、もちろん世代交代の主役は学生であり、彼らの言葉と生き方です。だからこそ私たち主事・GA は学生たちに全力で御言葉を語り、祈りと御言葉を中心とした交わりをもちます。

しかし、それとともに今回の合宿で強調したのは、卒業生の姿こそが、最も力強いメッセージとなり、世代を超えた継承に用いられるのだということです。卒業後、遣わされた地に、どれほどの痛みや苦しみがあっても、葛藤や弱さがあっても、その地で福音に生きることを、キリストの教会を建て上げることをあきらめておられない KGK 卒業生たちが世界中にいます。彼らの存在こそ、KGK での経験が人生の土台となること、KGK スピリットが生涯意味をもつことのしるしであるため、学生たちが KGK 運動を担う動機づけとなります。

そのような思いで、私たち主事は卒業生たちのストーリーを学生たちに伝えています。私自身、最も卒業生の声を聞ける立場として、卒業生会の交わりで分かち合われたストーリーを分かち合い続けたいと願っています。なぜなら、卒業生の姿こそが、学生たちの KGK 運動を励ますからです。

家族のわたし

刈込 里沙

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
物理的に「家」を提供してもらっていてものすごく助かっています。1人暮らしは寂しかっただろうな、2人暮らしさせてくれてありがとう！

○今だから言える姉妹の危機は？
妹がまだ小さいときにあまりにも奇声が酷くて「こんなにうるさい生き物とこれから一緒に生きて行くのか…」とげんなりして妹苦手ギアが入ってしまったこと。その頃は妹を「奈々ザウルス」と呼んでいた。

○相手と過ごした大切な「時間」は？
あまり「一緒に何かをする」ということをしてこなかった姉妹だったけど、コロナによる自粛期間中に一緒に散歩に行くように。それから二人で色々話す機会が与えられて感謝な時間でした。

○相手を聖書の人物に例えると？
今の彼女に対してはちょっとぴったりな人物が思い浮かばない…。ひと頃は「放蕩娘」。そして自分を「放蕩娘の姉」だと思っている時期がありました。

○最近、相手に言えてなかった一言は？
好きなのは知ってるけど、お弁当のおかずの半分がブロッコリーなのは流石に多いと思うんだ。

刈込 奈々

○相手がいることで「助かっているなあ」と思うことは？
2人暮らし8年目。話し相手が居て毎日楽しい。あとお姉ちゃんが作る料理がどれも美味しい。

○今だから言える姉妹の危機は？
冷蔵庫にたくさん食材があったほうが料理が捗って嬉しい姉 vs. フードロス嫌いな妹

○相手と過ごした大切な「時間」は？
2021年のアドベントカレンダーと共にくれた24日分の手紙を読んでる時間。姉からもらった素敵な手紙の内容について思いめぐらす、良い時間を頂きました。

○相手を聖書の人物に例えると？
原稿のご依頼を頂いてから約1か月、ずっと考えていますがピッタリな人が思い浮かびません…！どなたか、思いついたら教えてください！

○最近、相手に言えてなかった一言は？
2か月前に買ったサツマイモ、いつ使うの？

妹 刈込 奈々
東京女子大 16 年卒

教会
所属：日本同盟基督教団 横浜白山道教会
/ 出席：日本同盟基督教団 麻布霞町教会

仕事 不動産
家族 父、母、姉、私
趣味 スノボ
好きな食べ物 HARIBO

姉 刈込 里沙
大妻女子大 11 年卒

教会
日本同盟基督教団 横浜白山道教会

仕事 KGK 事務局主事
家族 父、母、私、妹
趣味 散歩、おかし作り
好きな食べ物 ラム肉

abstract black grunge image provided by jp.freepik.com

石原献二

K. Ishihara 帝京大学2009卒、立教大学大学院2011卒
筑西市役所（茨城県）総務部付主任（国のシステム関連機関に出向）

Theology of Work
仕事の神学

わたしは神から何を任されているのか
神の世界において何のプロフェッショナルとして召されているのか
キリスト教の視点でわたしたちの仕事を「神学」するリレー連載

Professional 地方公務員

石原献二にとって「地方公務員」とは ――― 主が託した地上管理を実践する仕事

茨城から東京の大学に進学し、就活にさしかかる頃、KGKの仲間と進路を祈り求めた。就職する者、進学する者、神学校に行く者。その流れはゆっくり都心に向かっていくように見えた。地元である茨城の母教会の信徒が減り、疲弊する様子を耳にしていた私は、そんな友の報告をひとつひとつ聞くたび、喜びと同時に複雑さも感じた。人それぞれ導きがあるのは分かる。しかし脳裏には草木に覆われ屋根に穴の空いた、水田地帯に佇む会堂があった。

母教会は無牧になった。東日本大震災で会堂は半壊。信徒は数名。経済的に困窮し、牧師を招けない。教会は、存続の危機に立っていた。必要なのは、祈りと献金。そして、教会を「内側から」励ます若い力。そう考えた。私は、某県の職員を辞し、地元の市職員となった。「教会を建て上げよう」などという気負いはなく、「若いし何かできるだろう」くらいの気持ちだった。しかし、神様の導きはちっぽけな私の考えを大きく越えた。宣教師という同労者が与えられた。度重なる協議の末の会堂建築、移転へと導かれた。古い土地は役所の同期が購入し教会債はすぐに完済。皆でトラクトを配り歩くと、新来会者が与えられた。若い洗礼者がおこされ、そして牧師招聘に至った。気がつけば職業選択は、微力ながらも教会の宣教的必要に応えたい、という願いに影として結びついていた。

ここからは地方公務員（行政職）として教えられた使命、「仕事の神学」について分かち合いたい。

【1】神様が人に託した地上管理（創1:28、ルカ19:11-26等）を土台に、法令・条例に基づき、託された分野・範囲を主体的に担うこと。多数のノンクリスチャンによって行政サービスが保たれているため（ロマ13:4）、地上管理の意味を教えられた者として内部から執り成しの祈りを続けること（自分の仕事の出来不出来はともかく）。

【2】都市集中（日本経済の発展）と引き換えに衰退した地方の修復に取り組むこと（エゼ22:30）。地方への視点は、ガリラヤでの主イエスの姿から励ましを受けた。主イエスご自身、宣教期間の大半をガリラヤで過ごされた。大都市でなく山間の農村や湖畔の町々など辺境のユダヤ社会を多く歩まれた。何をお考えだったのだろうか。預言の成就のためか（イザ9:1、マタ4:15）、身を避けるためか(マタ4:12)、いずれにしても、主イエスの眼差しが「忘れられた地方の人々」にも向けられていたなら、地方公務員として大きな励ましである。

今は国に出向し、莫大な予算を伴うナショナルインフラに携わっている。しかし、この日本という国も広い世界から見れば一地方であることに変わりない。宣教的必要に応えたいという思いと、みことばから教えられた「仕事の神学」を欲張りにも両輪に据え、今日も御国の建設に取り組みたい。

ブックレビュー

『死を友として生きる』「最大の贈り物」&「鏡の向こう」

ヘンリ・ナウエン著、廣戸直江ほか訳、中村佐知解説、日本キリスト教団出版局、2021年

キリスト者の信仰は、死の先に神の国での永遠の命が与えられるということにあります。それは確かな希望で、私たちが伝えるべき福音です。一方で、誰しもがその時を迎える死については、私自身、永遠の命への通過点やいつか必ずやってくる死の恐れを横に置いておくためのものとして見てしまいがちだと感じています。

一昨年父が天に召され、家族を天に送る寂しさ・悲しみ・復活の希望があることを味わいました。昨年結婚して、「死が二人を分かつまで」という誓約をした相手が自分のどちらかが、父が天に召された時の思い（寂しさと悲しみ）を味わうのかと考えたら、死がさらに身近なものになりました。とりわけ、父を天に送る経験は、私に御国での再会を確かなものとされるものでした。その意味で、父は私を死と親しませる助け手だったと言えるのかもしれません。

本書では、「自分自身の死と親しむ」ことと「他の人々が死と親しむ手助け」について書かれています。神様が与えてくださった命を、死と親しみながら生きるための良い助け手となる本だと思います。

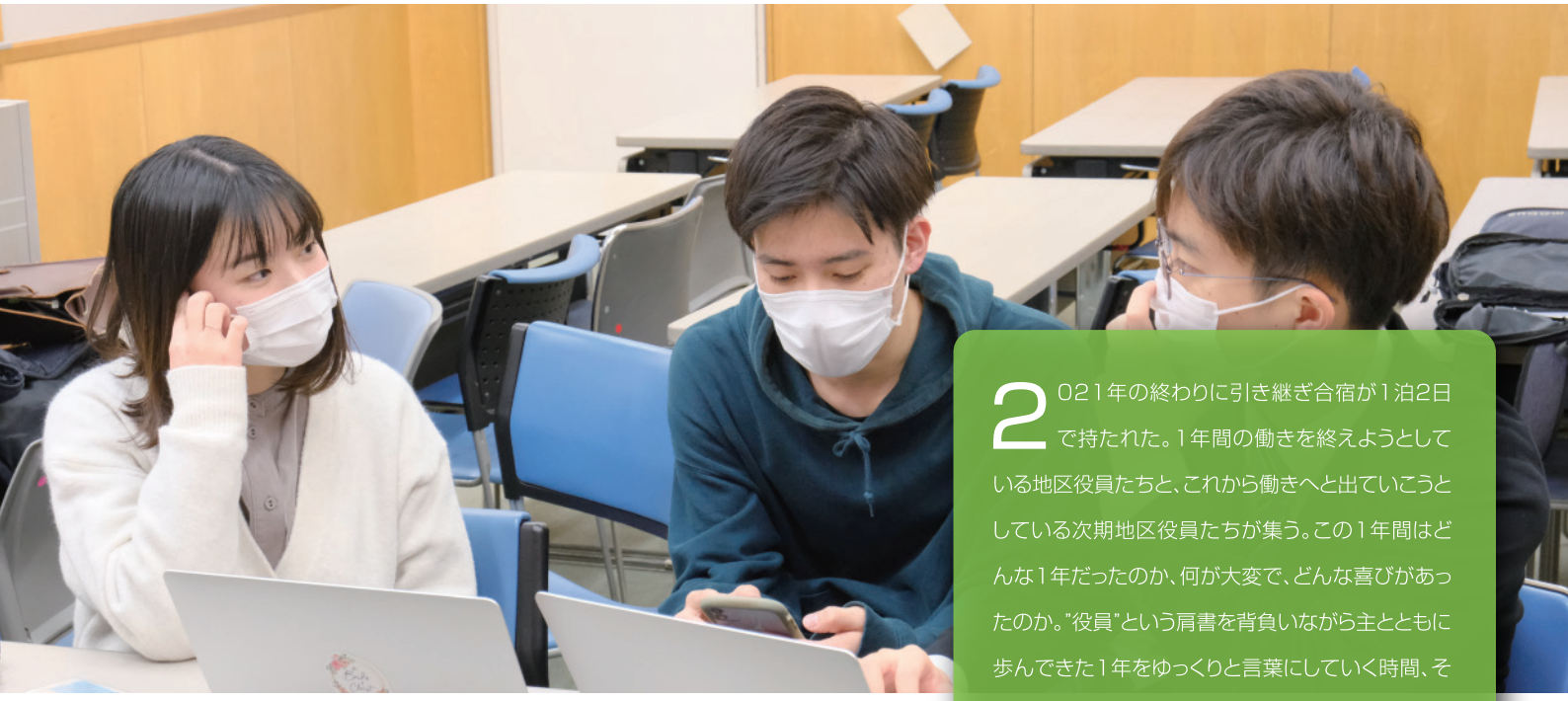
紹介者 吉川真理（旧姓森野）
日本基督教団福野伝道所・福光教会 副牧師

学生世界のリアル

主事の働きを通して知る、今のKGK。
主事の視点から見る、学生宣教の最前線。

関東地区主事　**橋本一空**

担当ブロック　多摩、神奈川BAY、信州
所属教会　JECA つつじヶ丘キリスト教会



2021年の終わりに引き継ぎ合宿が1泊2日で持たれた。1年間の働きを終えようとしている地区役員たちと、これから働きへと出ていこうとしている次期地区役員たちが集う。この1年間はどんな1年だったのか、何が大変で、どんな喜びがあったのか。"役員"という肩書を背負いながら主とともに歩んできた1年をゆっくりと言葉にしていく時間、そしてその言葉を次世代に語り継いでいく時間がそこにはあった。

繋がれるバトン

KGKが七〇年以上にわたってその働きを続けてこられたのは、そこに丁寧な引き継ぎがなされていたからだろう。KGKが考え続けてきたスピリット、試行錯誤の中で生まれていった具体的な働き。先輩たちが主とともに歩んできたその軌跡がちゃんと言葉にされて次世代に引き継がれていく。この働きを丁寧に重ねてきた歴史が今のKGKを形作っている。

今回の引き継ぎ合宿もその働きがまた一つしっかりと重ねられた時間だった。withコロナ、ポストコロナを見据えながら今年度の地区役員は「KGKって、」という問いを改めて考え続けてきた。その中で見えてきたもの、見えきらなかったもの。その一つ一つをじっくりと思い巡らしながら互いに感謝し、言葉にして次の地区役員へとバトンを繋いでいく。一緒に一年間仕えてきた学生たちはとても頼もしく見えた。

一方で、そのバトンを受け取った次期地区役員たちには驚きと戸惑いが見受けられる。こんなに心も体も知性も注いでなされてきた働きがあったのかと驚くのである。そして、このバトンをこんな私が受け取ってしまったという戸惑いと、この先本当に大丈夫なんだろうかという不安に駆られそうになる。

主事たちの間では、バトンを受け取ったばかりの新しいチームをどう励ますことができるのか、新しいチームはどんなチームになるのか、そんな不安が分かち合われた。始めには学生だろうと主事だろうと関係ない緊張感や不安がある。特に、私のような新主事は、一月から始まる地区役員のスタートを初めて体験するのだ。

それでも、丁寧に作成された引き継ぎ資料と、先輩の励ましの言葉に支えられながら、新しい一年をどのような一年にしたら良いのだろうかと先を見据え知恵を振り絞っていく。与えられた仲間との交わりを楽しみつつ、この働きを主に捧げていくとはどういうことなのか、どのように地区に仕えることができるのかとコミュニケーションが始まっていく。ああ、今年もちゃんとバトンがつながったという安心感と、主がこのバトンを繋ぎ続けてくださるのだという期待がやまなかった。

FRESHERS

関東地区主事 富田詩織

趣　味	読書、映画観賞、テレビゲーム
学生時代の専攻	文化人類学
性　格	わりとぼーっとしていると思います。
マイブーム	ビートボックスの動画を見ること

幼少期は父の学びの関係で非常に引越しが多く、海外と日本を行ったり来たりしていました。言語、考え方、食べ物、生き方、自分にとって「当たり前」の事が何度もひっくり返される経験を重ねるうちに、「当たり前なんて無い」という現実をかなり早い段階で受け入れていたように思います。学校全体でアジア人が片手で数える程度しかいないという環境の中で、マイノリティーとして生きる孤独さ、無自覚な偏見や先入観がどれだけ傷付く事なのかを身をもって体験しました。そういった経験を通して、なるべく人に対して先入観や偏見を無くしたいと思うようになりました。この考え方は、クリスチャン同士の交わりにおいても大切にしたいと考えている事です。

KGK は超教派の交わりです。幅広い信仰のバックグラウンドを持つ学生たちが集まる交わりですから、自分とは異なる考え方に出会い、自分の「当たり前」をひっくり返されるような経験をする事もあるかもしれません。特に信仰の事となると、私たちの人格や存在の軸に限りなく近い部分が脅かされるような経験ですから、ある人は恐れを抱くかもしれません。

私は「違い」へ耐性が強くなるように神様に育てられたので、「違いへの恐れ」の緩衝剤のような存在になりたいなと願っています。まだまだ変えられている最中ですが、イエス様のように偏見や先入観無く色んな考え方の人と交わりを持ちたいです。

キリスト者学生会 関東地区卒業生会誌 コイノニア 2022年2月 207号

編集委員：関山宜孝、小谷枝薫、桑島大志、阿部聖香、西村信幸、吉田明理、林直也、道法涼子、河野言葉、塚本良樹（主事）
発行：キリスト者学生会関東地区卒業生会　東京都千代田区駿河台 2-1　OCC ビル 3 階
TEL/FAX：03-3294-6916/6050　郵便振替：00170-1-83649　発行部数：1600 部 / 年 4 回

【編集後記】
今号から本格的に編集作業に関わるようになりました、道法（どうほう）と申します。名乗るたび必ずと言っていいほど「もう一度」と聞き返されますが、道路交通法の…と伝えれば、ああと認識いただける苗字です。年明けには念願のコイノニアメンバーとの初対面が実現。直接交わりを持てる嬉しさをしみじみと噛み締めました。これからデザイン担当として頑張ります。よろしくお願いします。